

夏目漱石とチャールズ・サンダース・パース

——暗示の法則とは何か——

佐藤 深雪

はじめに

この小論の目的は、夏目漱石(1867~1916)がCharles Sanders Peirce(1839~1914)の影響をいつからどのように受けたかを明らかにすることである。両者の文献を検討すると、1907年5月に刊行された漱石の『文学論』¹にその痕跡があり、さらに漱石がパースを知ったのは英国留学中の1902年まで遡り得るのではないかと推測される。

取り上げる漱石の文献は、『文学論』第五編を中心に、講演記録「文芸の哲学的基礎」と遺稿メモUnknowableである。パース論文は、1891年から93年にかけて雑誌『モニスト』に掲載された連続論文の中から「精神の法則」²を中心に検討し、1902年に刊行された辞書の項目Reasoningを参照する。

小宮豊隆の解説によって『文学論』の成立過程を簡単に述べておくと、1903年9月から5年6月にかけて東京帝国大学で行った「英文学概説」の講義録である。その整理を弟子の中川芳太郎へ委託したのは6年5月、漱石の校閲作業が実際に進んだのは7年3月下旬の頃であるという³。中川の序文によれば、漱石の加筆は、最初は字句の修正にのみ限られていたが、中頃には漸く密になり、「遂に第四篇の終り二章及び第五篇の全部に至りては悉く先生により稿を新たにせざるべからざりしなり」(14:17)という。パースの影響は、この増補部分に集中して認められる。

「文芸の哲学的基礎」の講演は、東京美術学校において1907年4月に行われ、翌5月から6月にかけて『朝日新聞』に連載された。漱石の序文によれば、速記記録を見ると非常に混雑しているので全部を書き改めることにしたが、元の原稿の約二倍になってしまったという。『文学論』の増補の状況とあわせ見ると、1907年5月以前に増補をうながす具体的な契機があったのではないかと予想される。

従来から『文学論』には増補部分とそれ以前との間に変質があると考えられてきた。しかし、その原因については、ダーウィンやスペンサーの影響などがさまざまに検討されているが定説はない⁴。本論では、従来から大きな影響があるとされているウィリアム・ジェームズ(1842~1910)を経由して、パースの影響があることを提起する。

ジェームズとその師であり朋友でもあるパースは、アメリカに興ったプラグマティズム哲学の創始者であり、このプラグマティズムは一般に考えられている実用主義という意味を越えて、旧大陸ヨーロッパの観念論を根底からくつがえす真にアメリカ的な哲学の確立であると言われている⁵。漱石はイギリス留学中からヘンリー・ジェームズの小説とともに、その兄であるウィリアム・ジェームズの心理学の著作に触れており、漱石文庫にも兄弟の著作が所蔵されている。ヘンリーの小説の主人公がヨーロッパに同化することができず、その退廃と暴力性を炙り出してしまうように、漱石も

1 漱石作品の引用は、『漱石全集』(夏目金之助、岩波書店、1993-2004年)により、ふりがなを省いた。巻数と頁数を次のように略記する。第14巻17頁=14:17

2 以下のパースに関する日本語の引用は、M・R・コーエン編、浅輪幸夫訳の『偶然・愛・論理』(三一書房、1982年)により、英文は以下の影印資料による。
<http://archive.org/details/monistquart02hegeuoft>
<http://archive.org/details/monist18instgoog>

3 小宮豊隆の新書版全集に付された解説。『漱石全集』第18巻、岩波書店、1957年、418-428頁。

4 島田厚、「漱石の思想」、『文学』28巻11号、29巻1号、岩波書店、1960年11月、1961年1月。重松泰男、『『文学論』から『文芸の哲学的基礎』『創作家の態度』へ』、『作品論夏目漱石』所収、双文社、1976年。加茂章、「決定論を超える漱石」、『日本文学』33巻3号、日本文学協会、1984年3月。小倉脩三、『夏目漱石 ウィリアム・ジェームズ受容の周辺』、有精堂出版、1989年。小森陽一、『漱石論——21世紀を生き抜くために』、岩波書店、2010年。

5 伊藤邦武、『社会の哲学18-20世紀 進歩・進化・プラグマティズム』、『哲学の歴史』第8巻)、中央公論新社、2007年、463頁。

6

拙稿「集会的Fとは何か——プラグマティズム社会学と夏目漱石」、未刊行。

7

伊藤邦武、「プラグマティズムの源流」、『分析哲学とプラグマティズム』（『岩波講座現代思想』第7巻）所収、岩波書店、1994年。金井光生、『裁判官ホームズとプラグマティズム』、風行社、2006年、111-123頁。

また英文学に共感することができず、その内面化を拒否した。漱石のプラグマティズム受容は、この意味で疑いもなくポストコロニアルなものである。

さらに、1907年の小説『野分』では、白井道也は、「国家主義も社会主義もあるものか、只正しい道がいいのさ」(3:423)という。一方で日本が進みつつあった戦争へ至る国家主義、一方で全世界を席卷しつつあった社会主義、その両方に抗して、プラグマティズムは二十世紀初頭の漱石が選び得る第三の道としてあったと考えられる⁶。

ところが、プラグマティズムの創始者として並び称されるジェームズとパースを比較すると、その哲学は同床異夢の様相を呈しており、心理学にもとづいたジェームズの個人主義と、論理学にもとづいたパースの共同体主義には大きな懸隔があったといわれている⁷。本論では、十九世紀末に心理学用語として登場する suggestion をとりあげて、漱石の暗示の用法がジェームズではなくパースに基づいていることを検証する。その検証の射程は、パースの共同体主義を経由して、漱石の則天去私へ至るものと予想される。

1. 精神の法則

パースの「精神の法則」は、精神作用の一般法則を検討することを目的としている。そして検討すべき精神の法則はただ一つしかないという。

精神現象に論理的分析を加えてみると、精神の法則はただ一つしかないということが明らかになる。それは、すなわち、観念というものは連続的に拡大し、自らと感応可能性という特別な関係を保つ、他の特定の観念にたいし影響を及ぼす傾向をもっている、ということである。この拡大する過程において、観念はその強度を失い、とくに他の観念に影響を及ぼす力を失うが、その反面では、一般性を獲得し、他の観念と結合した状態となる。(251頁)

観念は拡大して他の観念と結合し、一般性を獲得するというただ一つの法則をめぐって、「精神の法則」は16章に亘る考察を展開する。おもな見出しを書き出すと、「精神の法則とはなにか」「観念の連続性」「無限と連続一般」「時間の分析」「感情は強度のうえでの連続性をもっている」「感情は空間的広がりをもつ」「精神の法則は論理的形式に従う」「精神的作用の不確実性」「パーソナリティ」「コミュニケーション」などである。

この構成は、「文芸の哲学的基礎」と重要な部分で重複しているように思われる。「文芸の哲学的基礎」は『文学論』第五編以下と重なる部分が多く、よく整頓されたそのダイジェストとなっている。27回に亘って朝日新聞に連載されたその見出しは、「物我の関係」「意識現象」「意識の連続的傾向」「意識の内容」「時間、空間、数と因果関係」「意識の分化作用」「芸術家の理想」「技巧論」などである。まず意識の連続性が提起され、時間と空間の分析がそれに続き、数と因果関係という法則の論理性に言及する。一方、パースの「精神の法則」でも、まず観念の連続性が提起され、感情における時間と空間の分析が続き、そして精神の法則の論理的形式が論ぜられる。この整然とした構成を、漱石はパースの「精神の法則」に負っているのではないか。

「集合的F」と題された『文学論』第五編は、個人の意識の焦点Fについて述べてきた第四編までに対して、一時代あるいは一社会の集合意識の焦点Fを考え、その類別、推移、変遷を述べようとする。そして、「一時代の集合意識が如何なる方向に変化して、如何なる法則に支配せらるゝかを論ずるは此章の目的なり。」「一時代に於る集合意識の播布は暗示の法則に由つて支配せらる。」(14:437)と述べて、集合的Fは暗示の法則に従うことがまず主張される。このとき、「とくに文学の範囲内に於てのみ行はるゝ理法にあらざるよりは、別に之を差別して文学に於る云々と云はず。」(14:420)とあるように、これが文学だけでなく社会にも政治にも普遍的に通用する理法であるという。

パースと漱石のもっとも重要な共通点は、普遍的に行われるただ一つの精神の法則を見出そうとしていることである。そして、その法則は、パースは論理的形式に従うといい、漱石は理法であると述べて、ともに論理的なものであると考えている。

2. 偶然と習慣

パースが精神の法則といい、漱石が暗示の法則というその法則とは具体的にどのような内容をもつのだろうか。ここでは、偶然と習慣というたがいに対立しながら同時に働く一対の構造として考えていきたい。

パースは第三論文「鏡のごとく脆き人間本質」のなかで次のように述べている。

要約していえば、多様化は偶然＝自発性の痕跡であり、多様性が増大するところではつねに偶然が働いているにちがいないのである。一方また、一様性の増大するところではかならず習慣が活動しているにちがいない。しかし、既成の一様性のもとで作用が起こるばあい、たぶん、そこに生じる強い感情は反作用という形式をとるであろう。(314頁)

パースの偶然＝自発性がどういう意味を持っているかを考えるのは、偶然とは何かという困難なテーマである。この引用にそくして解釈すれば、多様性が増大するときに、何かいまままでにない新しい要素をもたらしてくれる契機が偶然＝自発性である。

他方、一様性が増大するところではかならず習慣が活動しているというときの習慣とはどういう意味だろうか。パースは第一論文の「習慣の法則」と題された章で、精神作用における第一義的基本法則は一般化の傾向であり、習慣の意識が一般的概念を構成すると述べている。その例として、感情の動揺がどのように増大するかを説明して、「新しい動揺は、それに先行する動揺に同調しがちである。興奮することによって、感情は、とくに以前に興奮したときと同じ仕方で、ますます容易に興奮するようになる」(212頁)という。過去と同じ仕方で行動することによって習慣を獲得し、その習慣に従うことによってさらに習慣は強化され、一様性が増大し、ついには一般化する。習慣とは過去に準拠することによって一様性を増大させていく精神の法則である。

翻って、偶然＝自発性とは、多様性を増大させる精神の法則であるだろう。どのように多様性を増大させるかといえば、「法則からの微小なずれ」(242頁)あるいは「規則性からの偶然的逸脱」(312頁)によってであるという。習慣が刺激を除去する力であるとすれば、その刺激の除去とともに反応は終わるはずであるが、除去されない

ときには、「興奮は持続し、増大して、非習慣的反応が生じる」(312頁)というのがその説明である。習慣からの微小な逸脱によって、非習慣的すなわち偶然的反応が生じ、多様性が増大する。習慣は一様性を増大させ、偶然が多様性を増大させる、これがパースの精神の法則である。

このときに、偶然性はなぜ自発性と等しいとされるのだろうか。一般に偶然性と自発性は相反するものとして考えられているのではないか。パースは習慣と偶然を三つの推論形式に対応させて説明している。推論形式とはふつう演繹と帰納を指すが、パースは仮説推理(abduction)を加えて三つとする。まず、「演繹においては、精神は習慣、もしくは観念連合の支配を受ける」(277頁)、「演繹によって、習慣はある特定の機会に特定の反応を喚起するという本来の機能を遂行する」(280頁)。そして、「帰納によって習慣が確立されるようになる」(277頁)、「帰納によって、同一の反応を伴う多数の感覚作用が、その同一の反応を伴う一般的観念のもとに統合されるようになる」(280頁)。つまり、演繹と帰納は習慣形成にかかわる推論である。一方、仮説推理の場合には、「なにか熟練を要する動作をするばあいにみられるように、ある特殊な仕方ですさまざまな反応を統合する力をわれわれが獲得するたびごとに、精神は右にのべたのと同じ仕方でもく」(279頁)とあるように、この推論は、まだ知らない新しい仕方を獲得するという意味で多様性を増大させる。そして、この推論が自発的なものであることを、パースは通常からはずれた身体動作を習得する例で説明している。

この動作を習得するためには、まず、この動作の別々の部分におけるいろいろの動きに注意を払う必要がある。そうすると、その動きについての一般的な概念がにわかに頭に浮んできて、その動きがまったく容易になる。すなわち、われわれが行おうとしている動作にはこの動きと、この動きと、この動きとが含まれているとまず考える。すると、それらの動きを統合する一般的観念が現われ、そこで直ちに、その動作を成しとげたいという気持ちとその一般的観念を指名するのである。(279-80頁)

動作の部分部分に注意を払っていると、その動きについての一般的観念が現われ、そして、その動作をなし遂げたいという気持ちとその一般的観念を指名する。このとき、一般的観念にふと気づくことは偶然であるが、そのようにして現われた観念をそれと名指すことにはなにがしかの自発性がある。未知のその動作ができるようになるためには、未知のその動作を当てずっぽうにそれと名指す必要がある。ばらばらな事柄の全体像にふと気づき、それと名指すとき、偶然性と自発性は同時に働いている。これが仮説推理における偶然性=自発性の意義である。このようにして、パースが述べた習慣と偶然の二極構造は、習慣と偶然と自発の三極構造でもある。

3. 予期と暗示

パースの精神の法則が習慣と偶然によって説明されるとすれば、漱石の暗示の法則は予期と暗示によって説明されるだろう。そして予期がパースの習慣そのものであるなら、暗示もまた偶然=自発に相当するような二極構造を備えているのではないか。

『文学論』第五編第四章「原則の応用(二)」では、これまでの内容を整理して、次のように述べている。

適当なる新しき暗示に接せざる時、吾人の意識は約束的内容を約束的の順序に反復す。〔中略〕書を読んである句に及ぶとき、過去の記憶によりて、此ある点、ある域、ある句の後に自然の勢として随ふべき端的を未だ随はざる刹那に予期する事あり。もし此予期の適中して、吾人の欲するものを意識し得るときは吾人の推移は盤上に球を転ずるが如く、寸毫の障礙を感じずして神意の安きを得べし。是暗示の反復によりて推移の容易を得たる傾向に逆ふ事なくして進行すればなり。此際に於ける予期は記憶より来るが故に、此際に於ける暗示は新しき性質を帯びざるは明なり。(14:459-60)

記憶にもとづく予期の暗示と、新しい性質を帯びた暗示とが区別されている。予期の暗示とは、約束の内容を約束の順序に反復し、過去の記憶にもとづく暗示である。この予期の暗示は、第二章では、「吾人の意識推移は習慣の結果によつて連結せられたる内容を、習慣の結果によつて得たる秩序に配列しつゝ、進行して、之を繰り返すを常とするものなり」(14:441)と述べられていた。これはパースの習慣と同じ働きである。

一方、新しい性質を帯びた暗示については、第五編第三章がそれに当てられ、さらに第五章で補遺されている。第三章では意識推移の原因は倦厭であるとして、いくつかの例を挙げている。第一例はロンドンで同宿した老人で、常に同一時刻に起臥飲食してそれを終年繰り返している。単調そのものであるが、「其闔内に在つてはそれ相應に変化しつゝあり、否変化を求めつゝあるは争ふべからず」という。第二例は毎日印刷される新聞で、「新聞の内容は三百六十五日を通じて同一ならざるは明らかなり」という。第三例はすべての専門家や芸術家である。

尤も興味あるは彼の浄瑠璃の如く、落語の如く、謡曲の如く、此等は一定の闔を作つて闔内に循環して飽く事を知らざるに似たり。然れども少しく之を究むる時は倫敦の老人と同じく皆単調のうちにあつて変化を求めつゝ進行するものなり。(14:450)

漱石はこのような単調な循環を繰り返す人々をたとえば『門』で描いている。甲斐の反物売りは、この四五年来いつ見ても同じ事で、少しも変らないといい、墨筆売りは、商売と坐禅を循環小数のように繰り返して飽くことを知らないという。しかし、単調な繰り返しは、じつは変化の兆しでもある。野中宗助の生活も単調のうちにあつて変化しつつあり変化を求めつつあると考えなければならないだろう。春になってお米には子どもができるだろう。罪は、単調な反復によって、気が遠くなるほどの時間をかけて、それでも賤われていくだろう。

パースによれば、単調な反復から生じる小さなずれが非習慣的反應の契機であった。「法則からの微小なずれ」(242頁)や「規則性からの偶然的逸脱」(312頁)が多様性の増大を引き起こすときに、パースはこれを偶然=自発性と呼んだ。では、漱石にもこの相反する様相があるだろうか。倫敦の同宿の老人について、「其闔内に在つてはそれ相應に変化しつゝあり、否変化を求めつゝあるは争ふべからず」(14:450)とあるので、この変化は自然であるとともに自発でもある。あるいは、頓悟の例がある。

禪に頓悟なるものあり、其説をきくに自から悟に近きつゝ、自から知らず、多年修養の功、一朝機縁の熟するに逢ふて、俄然として乾坤を新たにすと。この種の現象は禪に限るにあらず。(14:444)

自発的に悟りに近づこうと努力して、自からは知らないままに、機縁という偶然性に導かれて頓悟する。つまり自発＝偶然であるが、これを『文学論』では、突然＝次第という時間の様相として述べているようだ。第三章では新しい暗示、第四章では予期の暗示について述べたが、この二つは同時に活動し、兼有して働くので、第五章ではその様相を説明したいと漱石はいう。ところが第五章は意識推移は次第であるという一見不可解な原則を提起している。

而して此両傾向が同時に活動して意識の波動に影響を及ぼす事あらば、此両傾向に支配せられて出現する頂点の内容は論理上、下の如くならざるべからず。——全然新なるを得ず、全然旧なるを得ず。新に移らんとするとき旧は之を抑へ、旧を復せんとするとき、新は之を駆るが故なり。是に於てか第五章の必要を生ず。第五章に証明せんとするは、「吾人意識の推移は次第なるを便とす」の原則なり。(14:466)

新しい暗示と予期の暗示はたがいに牽制しあい、抑えると駆るが同時に働く。このときになぜ意識の推移は次第であるという原則が必要になるのだろうか。以下に述べられていく例は、突如の推移がじつは漸次であることを繰り返し述べる。すなわち、急転する意識の乾坤は、漸次に転化する乾坤と同じであり、反動の推移は漸次の推移である。

推移はかくの如く次第あり、順序あるにも関せず、外部にあらはれたる動作のみより之を論ずれば、金蘭の愛を一朝に変じて千古の恨となすの観あり。此観あるの点に於て此推移は正しく反動なり。(14:486)

第五章で述べられている突如＝漸次、急転＝漸次、反動＝漸次という例は、自分で意識できないまったくの偶然のようにおとずれる変化が、じつは意図して長い間だんだんに進めてきた変化と一対であるということ繰り返し述べている。つまり偶然＝自発を、時間の様相として見ると突然＝漸次となるのではないか。頓悟は意図した長い修行と、意図しない不図した偶然とが合わさって訪れる。これは出来事一般について言えることであると漱石はいう。とすれば、パースの偶然＝自発とは、漱石の突然＝漸次である。

以上のように、漱石は予期・突然＝漸次という三極構造をもった暗示の法則を、習慣・偶然＝自発の三極構造をもったパースの精神の法則にもとづいてそれを敷衍したと考えられる。漱石の暗示の法則をこのように見定めて、以下では具体的な文献に即して両者の関係を検証していこう。

4. 暗示とは何か

暗示の法則は『文学論』第四編までにはいっさい言及がなく、第五編第二章になって突如『文学論』のもっとも重要な法則として登場する。私はこの唐突さの理由をパースの影響であると考えるのであるが、パースは暗示という語をどのような意味で用いて

いたのだろうか。一柳廣孝⁸や佐々木英昭⁹が明らかにしたように暗示という語は、十九世紀末から二十世紀にかけてきわめて特殊なテクニカルタームとして心理学の分野で用いられた。この世界的文脈のなかでパースがどのように暗示を用いていたかを明らかにし、その上で漱石の暗示との異同を比較する必要があるだろう。

ここでは1901年から5年にかけて出版されたJames Mark Baldwin¹⁰の編集による *Dictionary of philosophy and psychology*¹¹の記述をこの時代の一般的な暗示の意義として紹介しておくことにしよう。この辞書は、心理学と哲学に亘る大辞典であり、英独仏米伊の学者を執筆陣に迎えた世界的辞書である。心理学にはウィリアム・ジェームズとジョン・デューイ、論理学にはパースの名がある。Suggestionの項目を執筆しているのはボールドウィンである。

まず Association of idea という第一の意義は現在では使われないう。第二は Janet や Wunds に支持されている定義で、意味を示唆するような観念や提起なしに心の中に入り込んでくるものという意味である。さらに、第三の意義としてボールドウィンは最新の心理学の動向を紹介している。ナンシー学派の催眠実験にもとづく暗示理論である。

It is these effects of suggestion, so thoroughgoing in the mental life, which has made its investigation important in recent psychology. It was first worked out in connection with HYPNOSIS (q. v.) and hypnotism (the suggestion theory of the Nancy school). Hypnosis is a state of prolonged or fixed openness to suggestion, called suggestibility. It is through the possibility of keeping consciousness in this condition itself effected by the suggestion of it that the nature and workings of suggestion were made the subject of prolonged and repeated experimentation.

The results have been gradually brought over into the normal mental life, and suggestion found to belong to the rib-structure the real skeleton of mind. (p.619)

さて、パースの「精神の法則」では suggestion という語が特殊な用語として注意深く使われているようだ。三つの例を検討していこう。なお翻訳者の浅輪幸夫は suggest を示唆と訳している。引用に際しては、まず翻訳文を掲げ、次に原文の一部を添える。

第一例は、ある観念が他の観念に影響を及ぼすという場合の説明に使われている。

ある観念がまだ未来の時点にあるうちに、その習慣の力によって、その観念と他の観念とのあいだに一つの絆が確立され、その絆によって当の観念は現在の意識にもたらされるのである。

ここにいたれば、われわれは、ある観念の他の観念による影響がどのようにして成り立っているかということが理解できる。それは、影響を受ける観念が、主語としての影響を及ぼす観念に、論理的述語として帰属するからなのである。したがって、ある感情が直接意識に出現するとき、つねに、その感情は、すでに精神のうちに存在する多少とも一般的な対象の変形として現れる。示唆という語は、この関係を表現するのに好適なことばである。未来は過去によって示唆される。

8 『催眠術の日本近代』、青弓社、2006年。

9 『漱石先生の暗示』、名古屋大学出版会、2009年。

10 漱石文庫にはボールドウィンの心理学書一冊が収蔵されており、従来から漱石との関係が指摘されている。藤尾健剛「『心』と『集合意識』——漱石のボールドウィン受容」(『漱石の近代日本』所収、勉誠出版、2011年)。

11 James Mark Baldwin, ed., *Dictionary of philosophy and psychology* Vol.2, New York: Macmillan, 1902. = <http://archive.org/stream/philopsych02balduoft#page/92/mode/1up>

あるいは、より適切に言えば、未来は過去の示唆によって影響されるのである。
(275-6頁)

The word suggestion is well adapted to expressing this relation. The future is suggested by , or rather is influenced by the suggestion of, the past. (*The Monist*. Vol.2 No.4 p.551)

影響を与える観念をA、影響を与えられる観念をBとすれば、現在または過去の観念Aは、未来の観念Bに影響を与える。その時の関係は習慣的なものであり前例にならうものである。そのために、あらたに意識に登ってくる感情Bは、これまでであった感情Aのなかに前例としてある形の変形として現れる。そしてAとBとの関係は、主語である一つのAに、たくさんある述語の可能性の中から一つのBという述語が選ばれて帰属する。前例にもとづきつつ(習慣的)、未来の可能性の中から一つを選んで引き寄せる(自発的)関係を、パースはsuggestionと表現している。

第二例は「精神の法則は論理的形式に従う」と題された三つの推論を説明する章のなかで使われている。

論理的推論には、大きく分けて、三つの種類がある。〈演繹〉、〈帰納〉、および〈仮説(形式)〉である。これらの推論形式は、人間精神の三つの主要な活動様式と対応している。演繹においては、精神は習慣、もしくは観念連合の支配を受ける。その習慣、もしくは観念連合にもとづいて、一般的観念はそれに対応する反応をそれぞれのばあいにおいて示唆する。さて、ある特定の感覚作用はそうした一般的観念を含んでいるとみなされる。したがって、そうした感覚作用はその観念の示唆する反応を伴う。胴体から切り離された蛙の後足は、だれかにつままれたとき、まさにこのようにして推理する〔中略〕。

習慣とは精神の法則の特殊化されたものであり、まさにこれによって、一般的観念は反応を刺激する力を獲得するのである。しかし、一般的観念がその全機能を発揮するためには、同時にまた、その観念が感覚作用によって示唆されうるものになる必要がある。このことは、精神の過程が仮説的推論形式をもつことによって成しとげられる。(277-8頁)

The three main classes of logical inference are Deduction, Induction, and Hypothesis. These correspond to three chief modes of action of the human soul. In deduction the mind is under the dominion of a habit or association by virtue of which a general idea suggests in each case a corresponding reaction. But a certain sensation is seen to involve that idea. Consequently, that sensation is followed by that reaction. That is the way the hind legs of a frog, separated from the rest of the body, reason, when you pinch them. ...

Habit is that specialization of the law of mind whereby a general idea gains the power of exciting reactions. But in order that the general idea should attain all its functionality, it is necessary, also, that it should become suggestible by sensations. That is accomplished by a psychical process having the form of hypothetic inference. (*The Monist*. Vol.2 No.4 p.552)

演繹においては精神は習慣もしくは観念連合の支配を受け、その習慣にもとづいて

一般観念はそれに対応する反応をそれぞれの場合に示唆するとある。そしてある特定の感覚作用はそういう一般的観念を含んでいるとみなされ、その例として蛙の足の反応が示される。つまり条件反射として知られる固定的な感覚作用は、習慣にもとづいた同じ反応をする。つまりこれは習慣的な suggestion の例である。

パースはさらに続けて、一般的観念が全機能を発揮するには仮説的推論形式をもつことによってなし遂げられると述べて、第三の推論である仮説推理に言及する。仮説推理では、一般観念が感覚作用によって示唆されるものになる必要があると述べている。つまり、演繹では過去の習慣や用例にもとづいて一般観念が示唆して感覚器官の反応が決定されるが、仮説推理では、逆に感覚器官から入ってくる未知の新しい情報が一般観念に示唆を与えるということだろう。過去の習慣からの示唆と、未知のさまざまな情報からの示唆を合わせて一般的観念の全機能が発揮される。

パースは、習慣的な暗示と新しさの暗示の両方を働かせる第三の推論をこのように定式化した。新しさの暗示は多くの可能性の束としてあり、そのなかのどれを選ぶかは当てずっぽうと言うしかない不確かな推論である。不確かではあるが論理的であり自発的でもある推論である。これまで勘や名人芸とされてきた推論を、パースは論理的・形式的に考察できるものとした¹²。これがパースの暗示であり、催眠術を方法論とした心理学の暗示理論とは根本的に異なるものだろう。パースの暗示とはすなわちアブダクションであり、新しい可能性の束に対してみずから未来を切り拓いていく自発性の萌芽が含まれている。これはダーウィンらの決定論に抗するパースの偶然主義の主張である。

第三例では、以上の過程をふまえて suggestion という用語が消去される。

瞬間的な諸感情は合流して一つの感情の連続体になり、その連続体は元の感情より劣るとしても、やはり感情に特有の活気を持ち、しかもまた、一般性をも獲得しているのである。そして、こうした一般的観念あるいは感情の連続体と関連づけてみれば、類似とか、示唆とか、外的なものへの関係とかにまつわるもろもろの難問は、その存在理由を完全に失ってしまう(282頁)。

And in reference to such general ideas, or continua of feeling, the difficulties about resemblance and suggestion and reference to the external, cease to have any force. (*The Monist*. Vol.2 No.4 p.555)

これは「精神の法則の再定式」という末尾のまとめの部分に述べられていることである。諸感情が合流して一つの連続体となるというのは、はじめに述べたパースの精神の法則そのものである。つまり、ここまでの過程で扱ってきた類似や暗示の法則はすべて一般的観念の法則のなかに解消されるということだろう。

パースはジェームズの心理学ときわめて近いところで仕事をしていたが、二人の間には確執があったといわれている¹³。その一つが後述するプラグマティズムをめぐる1905年の対立であるが、1892年の「精神の法則」にはすでにその兆しが醸されている。1898年の草稿でも、パースは連合的な暗示 associational suggestion と、催眠術師たちが用いる神経的な暗示 nervous suggestion とをはっきり区別していた¹⁴。つまり、二十世紀の新しい心理学の中心的概念である暗示という語が、パースによって論理的な推論の用語として解釈しなおされているのがこの「精神の法則」という論文で

12

新茂之は、パースがカントの直観を否定し、認識の無媒介性を退け、感覚や知覚をアブダクションに基づく認識として捉えたと述べている(『パース「プラグマティズム」の研究』、晃洋書房、2011年、20-25頁)。

13

伊藤邦武、「二つのプラグマティズム」、『パースのプラグマティズム』所収、勁草書房、1985年、68-73頁。

14

遠藤弘編、『パース著作集』3、勁草書房、1986=2002年、62頁。Arthur Burks, ed., *Collected Papers of Charles Sanders Peirce* Vol.7 Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1958=1966. p.299.

ある。ジェームズの心理学的探究とパースの論理的探究とが袖を分かつときの指標の一つがこの suggestion という用語の使い方であったと思われる。

漱石の暗示は、はじめジェームズの心理学にもとづきながら、ある時点でパースの論理的推論へと大きく転回したのではないか。これまで見てきたように、漱石の暗示は一つの法則であり理法であった。漱石のメモにも、The predominance of F in an Age is governed by the law of suggestion. (21:319)とあるように、個人はもとより社会・時代を貫く一般法則としてあり、この点がパースとよく共通している。そして、漱石の暗示は何か新しい独創的なものの獲得に関わる。『文学論』第五編第四章では、予期と暗示とを比較しながら、暗示は新生命を容れるために「波動の上の新暗示を得て、別乾坤に向つて、推移の線を曳かざるべからず」(14:463)と述べる。この何か新しい未知の独創的なものへの推移を考えると、パース哲学を特色づける仮説推理すなわちアブダクションの影響を考えないわけにはいかない。

5. パースと漱石

漱石におけるパースの影響を『文学論』にそくして考察してきた。では、漱石はいつどのようにしてパースを知ったのだろうか。これには二つの契機が考えられる。一つは帰国後の日本における直接の契機、もう一つは留学中の間接的な契機である。

パースはジェームズの師として友人として生涯親しい関係にあったが、1905年にプラグマティズムをめぐってジェームズを鋭く批判する。このプラグマティズム論争はすぐに日本にも伝わった。漱石とプラグマティズムの関係については従来ほとんど研究がなく、わずかに山田英世の「明治自然主義論争とプラグマティズム」に言及がある。山田によれば、日本におけるプラグマティズムの受容の歴史には、1905年12月に『哲学雑誌』の主催で行われた桑木巖翼の講演が重要である。『「プラグマティズム」に就て』¹⁵と題されたその講演は、翌年1、2月号の『哲学雑誌』に掲載されて反響を呼び、論戦に田中王堂が加わり、1906年の『哲学雑誌』は、桑木・田中両者の論戦に明け暮れるという有様だったという¹⁶。

桑木は、西欧の哲学界でプラグマティズムが流行していることを述べて、まず『モニスト』を含む哲学の雑誌四種類を紹介し、次にプラグマティズム命名の創始者であるパースについて説明を加えた。桑木はさらにジェームズ、ジョン・デューイ、フェルデナンド・C・S・シラーを紹介している。この詳細な紹介によって漱石は『モニスト』所載のパース論文を容易に閲覧することができたであろう。以上が帰国後に漱石がパースに触れた直接の契機である。

さて、小倉脩三は、漱石がジェームズを知るのは留学中であるとしているが、これは漱石の蔵書購入メモの日付からの推測である¹⁷。もし漱石が留学中にジェームズを知ったとすれば、その経由の一つは先に紹介した *Dictionary of philosophy and psychology* にほかならないのではないか。そこで、パース担当の項目 Reasoning を見ると、漱石のメモと重なるところが多いので、以下で検討したい。

まず、漱石のメモ Unknowable の冒頭を要約して示す。

15
西周編、『明治哲学思想集』、明治文学全集80所収、筑摩書房、1974年。

16
山田英世、『明治プラグマティズムとジョン・デューイ』、教育出版センター、1983年、51頁。

17
前掲小倉脩三(1989)8頁。

スペンサーは哲学を洗練させて、もっとも普遍的な科学とした。そして first cause として unknowable を建立した。人間の智識は sensation の経験から intelligence、perception、conception へと至る。これらから得たデータを一般化し、分類して、最終的に law とするのが科学である。

では科学は経験以外のものを assume 推測することはないのかと漱石は問いかける。

答テ云フ science ニテ classify シ generalise シテ law ヲ deduce スルハ practical convinience アレバナリ practical convinience アリトハ過去ヲ以テ未来ヲ推スコトヲ得ルナリ経験ニテ得タル formula ヲ経験以外ノ formula ニシテ手数ヲ省クヲ得レバナリ〔中略〕皆此 law (過去ノ経験又ハ実験ヨリ出ヅル)〔ヲ〕future ニ及ボシ又知ラザル(経験セザル)区域ニ及ボスニ過ギズ然ラバ science ナル者ハ uniformity of nature ナル大假定ノ上ニ成立スル者ナリ。(21:14-15)

経験にもとづいたデータを一般化し分類して法則をつくるのが科学であるが、経験にもとづいた推測とともに、経験していない区域へ合理的な推論を及ぼすこともまた科学の原理であると漱石は考えている。そして、プラクティカルな利便性から過去にもとづいて未来を推測するとあるように、パースのプラグマティシズムの要点である未来へ関わる推論を、科学におけるもっとも重要な推論としている。さらに、科学は自然の均一性の仮定の上に成立しているということが、経験を越えた合理的推論の可能性と結びつけて述べられている点にも注意しておきたい。

一方、パースは、推論とは economy 儉約にはかならないと述べている。

What need of reasoning was there? Is he not free to examine what theories he likes? The answer is that it is a question of economy. If he examines all the foolish theories he might imagine, he never will(short of miracle) light upon the true one. (Vol.2, p.423)

そして推論には三種類あるが、まず帰納法について説明を加えている。

Induction(at least, in its typical forms) contributes nothing to our knowledge except to tell us approximately how often, in the course of such experience as our experiments go towards constituting, a given sort of event occurs. It thus simply evaluates an objective probability. Its validity does not depend upon the uniformity of nature, or anything of the kind. The uniformity of nature may tend to give the probability evaluated an extremely great or small value: (Vol.2, pp.426-7)

帰納法がなぜ不十分であるかといえば、それが何か新しい知識をもたらすものではなく、単に予定した中での probability を示すだけだからである。

一方、漱石は、たくさんある可能性のすべてをしてみる煩雑を避けるために推論で一つを選ぶのだと述べ、このときに probability にも言及して、「煩ヲ避クル為ニ hypothesis ニテ一ヲ選ブナリ其選択ノ中レルカ中ラザルカハ事実ノ証明カ probability ニテ決スルノ外ナシ」(21:17)と述べている。漱石はまた、科学には合理的な想像を許す特殊な推論があると述べる。この部分の説明がパースの仮説推論によく重なっている。

即チ law ヲ apply スル ト キニ uniformity of n. ヲ apply セズ シテ law ヲ

generalise スルトキニ unknown quantity x ノ action ヲ exist スル者ト認メテ
hypothetical law ヲ造ル。此故ニ此 law ノ成立スルヤ否ヤハ x ノ exist スルカ否
〔カ〕ニ depend ス古來ノ發明家ハ皆 imagination ニヨリテ suggestion ヲ得然ル
後之ヲ verify セリ。verify シ難シト雖モ probability 多ケレバ此 hypothetical
law ハ其 probability ノ程度ニ proportional ニ valuable ナリ (21:15)

この説明こそが、何か未知の新しいXを發明するときの想像力の飛躍の法則である。この法則は發明家が古來常に使ってきたものであり、まず想像力によって飛躍し、しかるのちにそれを確認する。漱石はそのときに得る suggestion が、合理的な推論の法則に不可欠な要素であることを、早くもここではっきりと認識している。

一方、パースもまた suggest を推論を導くものとして使っている。

This diagram, which has been constructed to represent intuitively or semi-intuitively the same relations which are abstractly expressed in the premises, is then observed, and a hypothesis suggests itself that there is a certain relation between some of its parts—or perhaps this hypothesis had already been suggested. (Vol.2, p.428)

パースはこの仮説推論の形式を1800年代末にはすでに完成させているが、ほとんど公刊する機会に恵まれなかった。このボールドウィンの辞書のなかでも、PresumptionあるいはAbductionと呼ばれる仮説推論は間違うことも多い推論であり、probabilitiesとのバランスによって用いなければならない推論であること、そしてまた、他の論理学者とは根本的に異なる推論であることを断っている。

Presumption is the only kind of reasoning which supplies new ideas, the only kind which is, in this sence, synthetic. ... The hypothesis which it problematically concludes is frequently utterly wrong itself, and even the method need not ever lead to the truth: ... This doctrine agrees substantially with that of some logicians; but it is radically at variance with a common theory and with a common practice. This prescribes that the reasoner should be guided by balancing probabilities, according to the doctorin of inverse PRPBABILITY(q. v.). This depends upon knowing antecedent probabilities. (Vol.2, p.427)

このようにして、仮説推論の根本的な理解において両者はよく共通している。漱石のメモは、スペンサーの不可知論から出発して、「idealハ経験ノlimitナリ此不可知的ノ者ハlimit以外ノ者ナリ(3)之ヲassumeシタレバトテ何ノ利益モナシ」(21:16)と批判し、limitを科学的な推論によって超えていく方法を探っている。その推論こそパースの仮説推理である。

漱石のメモは、1901年の英国留学中から帰国後にかけて作成されたと言われているが、その年代を確定することができない¹⁸。一方、パースのReasoningの項目は、1902年に刊行された第2巻に収録されている。ボールドウィンの辞典には、生前に論文が公刊されることの少なかったパース哲学の精髓がもっとも手に入りやすい、そしてもっとも分かりやすい形で収録されている。漱石が留学中にパースを知ったとすれば、この辞典において他にないのではないか。

1906年のプラグマティズム論争に対して漱石がどのような感想を持ったかを知ることではできないが、田中王堂による「文芸の哲学的基礎」への論評(1908)に対して、漱石は「うんと踏まへられた余に、何うもうんと踏まへられた様な気が起らない」(16:380)と述べている。王堂はデューイにもとづいたプラグマティストであり、巖翼はイギリスのシラーによる定義を採用してジェームズ、パースらを退け、ヨーロッパ哲学の立場からプラグマティズムを偽哲学と断じた¹⁹。つまり、『哲学雑誌』におけるプラグマティズム論争は、パース哲学の深奥に触れるものではなかったと考えられる。漱石がこの論争によってはじめてパースを知ったとすれば、貶められたその哲学をあえて精読したとは思えない。そのために、1906年以前おそらくは留学中にパース哲学に接した可能性を考えたのである。

以上のように、英国留学中に刊行されたボールドウィンの辞典を通してパース哲学を理解していた漱石が、帰国後1906年のプラグマティズム論争を直接の契機として、『モニスト』所載のパース論文を精読したと結論する。決して明快とは言えないパース哲学は、パース自身による辞書解説を経由することで受容されたのではないか。

おわりに

「私の個人主義」(1914)には、『文学論』へまとめられることになる事業がいつどのようにはじまり、どうして途中で中止されることになったかが詳しく述べられている。

私はそれから文芸に対する自己の立脚地を堅めるため、堅めるといふより新しく建設する為、文芸とは全く縁のない書物を読み始めました。一口でいふと、自己本位といふ四字を漸く考へて、其自己本位を立証する為、科学的な研究や哲学的の思索に耽り出したのであります。(16:595)

『文学論』の試みは世界的にも同時代的にもまったく類例のないものであると考えられてきた。しかし、ここで述べられている科学的・哲学的思索とは、ジェームズの心理学であり、パースの論理学であると文字通り受け取ってよいのではないか。ところがパースはもとよりジェームズさえも忘れ去られた思想家であった。アメリカのジェームズ・ルネサンスは1950年代に入ってようやくはじまった復興の気運である²⁰。二十世紀初頭の漱石がパース哲学の重要性にいち早く気づき、その真髄であるアブダクションを取り上げたことには希有な先見性がある。『文学論』もまた久しく忘れられた業績であるが、漱石の新聞小説を通してパース哲学は広く日本の読者に受容された。

その一例を挙げれば、三四郎は熊本から上京したばかりで西洋料理を食べたことがない、神田で一番おいしいという店でご馳走になったが、西洋料理の味がするばかりであったという。未知の西洋料理を一回の経験から仮説的に推論して西洋料理という概念を得る例である。同じように、三四郎は、水蜜桃の男を赤門内で馬に苦しめられた男の例から広田先生であると仮説する。三四郎自身も「考へると、少し無理の様もある」(5:336)と述べているように、ここには後件肯定の誤謬といわれるアブダクションの論理的飛躍がある。三四郎はこのあと広田先生と親しく話をするようになり、その思いもかけない発想や暗黒面を知っていくことによって仮説を検算していくことになる²¹。

19

桑木巖翼、「田中君に答ふ(其一)」、『哲学雑誌』21巻237号、1906年11月、24頁。

20

ウィリアム・ジェームズ、樹田啓三郎、加藤茂訳、『根本的経験論』、白水社、1978年、加藤茂解説、278頁。

21

拙稿「偶然の構造——チャールズ・サンダース・パースと夏目漱石」、『比較日本文化研究』18号、比較日本文化研究会、2013年12月)参照。

小論では、パースの影響を暗示論について検証した。二十世紀の心理学で盛んに用いられた暗示という用語を、パースはその哲学のもっとも独創的な方法であるアブダクションによって論理的に解釈しなおした。漱石の暗示の法則とは、パース哲学のアブダクションにほかならない。両者に見られる習慣・偶然＝自発、予期・突然＝漸次という三極構造は、頓悟を典型的な例として、受動(偶然)的でありながら同時に能動(自発)的でもある人間の主体的な自由を確保している。この意味で、漱石晩年のいわゆる則天去私は、同時に自己本位であることにおいて、アブダクションの変奏である。「私の個人主義」にいう自己本位(自発性)は、パース哲学を経由して則天去私(偶然性)と対になることによって確かに立証されたのである。